

舌が痛い。駅で新聞を読みながらKが来るのを待っている間、そればかり考えていた。Kとの旅に味を占めた自分は、再び彼と旅に出る事となった。楽しみに満ち溢れたウキウキ気分ではない。そんなのだが、世の中、そうは問屋が卸さない。数日前、ふとした事で舌を噛んだ自分は、常軌を逸した悪化の仕方、妙な病気にでもかかっているのかと疑うくらい、舌の横側がいびつに変形して白く変色していた。辛いものが食べられないどころか、喋るのもままならない激痛で、ここ四日間、昼食は蕎麦ばかりという有様だ。漸く快方に向かつてはいたが、完治はしていない。これでは、いくらお喋りじゃない二人旅とは言えど会話も楽ではないし、何より旅先での食事が苦痛になる。そればかりが気になっていた。とは言え、考えても考えなくても痛いものは痛いものだから、その現実の中で楽しむしかない。かくして、自分は事情をKに説明した上で、脳疾患でも抱えているかの如き妙な発音の日本語で彼と話しながら、電車での旅を楽しんだ。前回はKの希望で飛行機を利用したが、今回は自分の希望で電車の利用である。小さな窓だけの狭い機内に詰め込まれて離陸した途端に着陸する移動ではどうにも風情に欠ける。相変わらず赤の他人みたいに別々に新聞に目を通してみたり、硬く仕事や社会情勢の話してみたり。話が途切れれば、ぼつと車窓を眺めて過ごす。目的地に近づいて

くると、線路脇に残った雪が目につき始めた。そんなこんなをのんびり楽しんでいる時も、頭の中では今度、ライブに行く予定のデヴィッド・ボワイが歌う“Beauty And The Beast”などが流れ続けている。

一先ず、電車は乗り換え駅の塩尻に着いた。乗り継ぎの電車が来るのを待たなくてもいいのだが、折角、時間があるのに、ホームに座っているだけでは勿体ない。自分達は何の当てもなく塩尻駅を下りて歩き出した。観光地でも何でもないのに、特筆すべきものは何もない。駅前で大人が遊べそうな場所もパチンコ屋と居酒屋だけだ。日本中、どこに行っても、この二つは存在するらしい。そんな事を話していると、地元のおじさんが自転車で乗り付け、パチンコ屋に入っていた。何となし塩尻市役所付近を徘徊し、役所の無駄遣いの代名詞とも言える立派な文化ホールなどを見て回る。これがまた、役人の陳腐なセンスの典型とも言える意味不明な片仮名の名前で「レザンホール」と言ふ。貼られていたポスターによれば、劇団四季のミュージカルを上演しているらしく、開店休業の閑古鳥という事ではなさそうだが、どうして、役人という生き物は、どこでも似た物を作って似た名前を付けて、文化振興だとか地元経済の起爆剤だとか聞き飽きた台詞を繰り返すのだろうか。

時間潰しに繰り出した町で長居して電車に乗り遅れては元も子もないので、そろそろ駅に戻ろうとした時だ。てくてく市役所裏

を歩いていて、Kが発見した。彼が示す物体は、どこの施設の入口にもある様な施設名を彫り込んだ大きな石である。が、書かれている事が普通ではなかった。

『児童館 跡』

は？ 一瞬、呆気に取られ、そして、大爆笑。確かに、そこに児童館と思しき建物は既になかった。以前はあったのだらう。しかし、城砦とか神社仏閣とか歴史的人物の生誕地とかならばまだしも、児童館などというありふれた施設に敢えて「跡」を残す必要があるのか。それも、その石は元々は児童館が現存していた時に使われていたものらしく、「跡」の字だけが、明らかに後から彫り込んだ様に位置も色合いも違っていた。実は塩尻の町の児童館は歴史的なもので、学校でも歴史の時間とくに習ったり、社会科見学で来たりして、「はい、ここが児童館跡ですよ」ってやってたりするんじゃない、などと二人で馬鹿話に花が咲いて大いに盛り上がる。この「児童館跡」が見られただけで、自分は十分に満足だった。旅に来て良かった。塩尻で下りて良かった。心から、そう思う。その後、横道でスナック「世逃げ」という絶妙のネーミングの看板を見つたりして、予想外に収穫の多い街だった。幸先のいい旅の始まりである。

思いつきり笑って、いい気分になった自分達は、塩尻駅から二両編成の電車に乗り、本日の目的地である奈良井へと向かった。電車で行きたいと主張したのは自分だが、それじゃ、どこに行く

のさとなった時、奈良井に行きたいと言ったのはKだ。地理に無頓着な自分は、彼に言われた時、「奈良井って、どこ？ 何があるの？」という有様だった。その後、ガイドブックを見て、木曾路で栄えた宿場町で、今も往時の町並みを残している所だと知って自分も興味を持った。何も言わずにKの趣味に任せても自分の趣味にも合致するというのは有難い事だ。

いざ、奈良井に着いてみれば、道は雪に覆われ、歩行者は殆どいない。それらも相俟って、実に風情がある。重要伝統的建造物保存地区とされているだけあって、電柱はなく、建物は昔ながらの木造の町屋しかない。屋根の庇からは、寒々しい氷柱が下がっている。黒澤映画にでも使えそうな風景で、今にも向こうから三船敏郎演じる用心棒が独特の歩調でやってきそうな雰囲気だ。内心、わくわくする。

今日は、ここに一泊する予定なのだが、チエックインの時間には早かった。という訳で、徘徊だ。先ずは、中心とも言つべき旧中山道ではなく、そこから少し脇に逸れた中央本線の線路沿いの道を歩く。慣れない雪道に足が滑りそうになりながらも、真っ白い雪と落ち着いた家並み、そして、肌を刺す心地好い冷気を味わう。

外れの権兵衛踏切まで約一キロを歩くと、そこからは、Kの提案で踏切を渡り、奈良井川を越える権兵衛橋を渡り、現中山道沿いの道から駅まで戻る事にする。これが、辛かった。どうやら、

その道は町の人が殆ど歩かないらしく、厚く雪が積もっていたのだ。子どもが駆け回って遊ぶのには最高だろうが、徘徊するには中々にきつい。一歩一歩が、ずぼずぼと嵌まり込む。つくづく、雪山登山をする人間の気が知れないと思う。こんな所で転んで骨折したら、ただの阿呆だなどと考えながら、自分達は木曾の大橋に着いた。木曾檜だけを使って平成三年に造られた太鼓橋だ。真新しい檜の色は美しい。しかし、雪が積もっているのだから、ただの道でも怖いのに、太鼓橋は尚更怖い。欄干を命綱の如く齒んで恐る恐る渡る。橋の上を吹く川風が酷く冷たい。水は綺麗だ。この場所にこの気候では都会の汚れに染まる事もないだろう。ホームレスなど生きていけようもない。ただ、若者にとっては、枯れた老人の如きこの町で燻っている気にはなれない。

木曾の大橋を渡って、公園、ふれあい広場を歩く。一面が雪に覆われているので、どこが歩道で、どこが溝か、全く分からない。童心に帰って楽しみつつも、三日後には出勤せねばならぬ身としては怪我する訳にもいかず、少々、おっかなくもある。再び駅前に出ると、今度は、メインの家並みが続く旧中山道を歩く。途中、掲げられていた看板には、「一年の始まりは、今日の一步から」といった言葉が書いてある。もっともな言葉なのだが、それを雪道で見るのは嫌な気分だ。ここで滑って転んだら、自分の今年一年はどうなってしまうのやら。迷信を信じない理屈っばい自分でも、いい気がしない。これは何としても転べない。そう思う自分とは

無縁の顔で、郵便屋さんのバイクが平然と走っている。雪道で、流石にプロだとKが感嘆していた。全く同感だ。少なくとも、バイクで居眠り運転して転んだ事があるKとは雲泥の差である。

その間も、始終、情緒ある通りを堪能する。自動販売機までもが目立たないように家屋と同じ茶系色に塗られている。雰囲気があるのはいいが、こんな江戸村みたいな町で普通に生活できるのだろうかと思うと、その町屋の一軒は、ちゃんと普通のスーパーだったりして、中で多くの人々が日常雑貨を買い込んでいた。何とも楽しい。度を越して便利な都会に比べれば、住む人にとっては不満もあるだろうが、何となく「人間」が住む場所だと思つた。

再び権兵衛踏切まで歩いてくると、今度は更に奥へ進んでみる。地元の神社が見えたからだ。この旅では、Kには明かしていない自分勝手な理由で神社をチェックしていた。雪の降り積もった、その「鎮（しずめ）神社」は、手水も凍っている。神社の由来を読んでみれば、この界限で病気を鎮めたという神様らしい。これはまた狙ったかのように最適の神様だと思つて、自分はお参りをした。

一応、自分なりの目的を果たすと、再び駅前まで戻る。これで二回往復して計四キロの雪道を歩いた訳だ。それも特別に変わったものを見る訳でもなく、時々、馬鹿話をしながら、ただ歩くだけなのだから、いつもながら普通とは言えそうにない楽しみ方である。駅前に着いて考えた。これといってやる事が無い。宿に行

くには、まだ時間が早い。実を言うと昼食を取っていないのだが、何となく時間が過ぎてしまったので、食べない事にした。今夜の宿の料理を美味しく戴くには、空腹で困る事は何も無い。このまま、どこかに座り込んで、ぼうつと町並みを眺め続けたい気もしたが、それでは寒さが身に沁みて連れのKにも悪いというものだ。そこで、宿とは反対方向にある二百地蔵を見に行く事にする。元来、小学生時代から仏像好きな自分は、国宝級のものも勿論、村の石仏といった類も興味がある。坂道を上がった所にある二百地蔵を目指して、転ばないように気をつけて半ば蟹股になりながら歩いた。途上の階段に雪が積もっている上に急なのに苦しめられる。案内の矢印の先は、またもや厚い雪。うえっと思いつつ、ここまで来て引き返すのも馬鹿馬鹿しいと、少し躊躇いがちなKを後ろに、ずかずか踏み込んでいく。あった。地蔵だか何だか分からないくらいに顔付きが削れてしまった可愛らしい小さな仏像が、ずらり並んでいる。雪に埋もれ、大きな木に囲まれ、静かに鎮座していた。実に秀麗気のある自分が大好きな空気感だ。本来、この道が旧中山道らしい。昔の人は、こんな道を徒歩で旅行したのだから大したものだ。そう思って、道を下りて行くと、先程、苦勞させられた階段の麓の横に出た。どうやら、自分は道を間違えて、わざわざ遠回りで歩きにくい方を進んだらしい。まあ、結果良ければ全て良しだ。Kも文句は言わない。つくづく、得難い友人だ。

すっかり情緒に浸ったところでいい時間になった。今夜の宿に向かう。友人Kが泊まりたいと主張した宿「彘ちこや」である。寛政年間（十八世紀末）から旅館として営業してきた老舗の旅館で、一日二組しか客を泊めないという宿だ。Kに言われてガイドを調べてから俄然泊まりたいと自分も思った。全く趣味が似た奴である。旅の計画の動き出しが遅かったので、一日二組では無理かとも思ったのだが、運良く予約が取れた。何せ、この町並みだから、期待できそうと思いつつ、宿の前に立つ。外見は、他の町屋と同じで、それらしい目立つた表示もないので、ここでのいかと少し不安を感じながら、引き戸を開けて中に入った。

最高だった。くだくだと説明を書く前に言う。これまで泊まった旅館の中で最高だった。迎えてくれた若いお兄さんに案内され、鰻の寝床の如く奥へと細長い造りの建物を進んだ。自分達の部屋は一階の和室二部屋である。二人連れには勿体ない広さだ。部屋が広いというのもあるが、余計な物が無い。テレビも電話もない。障子を開ければ、外は当然ながら雪景色。早速、自分達は炬燵に入って暖を取り、主が丁寧に入れてくれたお茶を啜った。

ここからの書き方は、少々、難しい。何せ書いた通り、これといった何かがある部屋ではないのだ。道後温泉の大和屋別荘の様に和風に強い拘りを見せていたり、上流の匂いを漂わせていたりする訳ではない。もう自然体に普通の「旅館」なのだ。旅館ではなく、「旅館」なのだ。綺麗とは言い難い襖や歴史を感じる柱は、

良く言えば味わい深い、悪く言えば薄汚れた感である。そして、何も無い。ただ、一人で炬燵に身を埋め、ぼうつとするばかりだ。これが、いい。何もしない、本当に何もしない時間ほど贅沢な時間の使い道はないというものだ。外は積もった雪で音が消され、聞こえてくるのはガスヒーターの稼働音くらいである。そんな中で、時折、ぼそりぼそりとKと言葉を交わしつつ、夕食の時間まで、のんびりする。うだうだとかだらだらではない。のんびりだ。傍から見れば、三十路の独身男が二人して何をしてもなく炬燵で向かい合っているというのは、お世辞にも格好の良いものではないが、当人にとっては十二分に幸せな時間なのである。

そして、更に幸せは続く。昼食抜きで迎えた夕食だ。凄腕の板前が控えた高級旅館というよりは家族経営の旅館なので、正直言えば料理については、平凡なものだろうとも思っていた。だが、予想は大いに裏切られた。美味い。素材を生かした薄味の料理は、どれもこれも唸る美味さだ。加えて注文した地酒の「杉の森」が、更に幸せを増してくれる。岩魚の付け合わせのカレー風味の玉葱やら、山芋と山葵やら、その他、悉くが癖や厭味の無い味で、すっかり上機嫌にさせられた。当初、舌の治りが気になっていたが、それも、ぎりぎりですべて完治して、何も気にせずに食事を楽しめた。これは、どうしても訊かずにいられないと思ひ、この料理を誰が作ったか訊けば、最初に案内してくれて給仕もしてくれている若いお兄さんだった。さぞ、あちこちで修行でもしてきたのかと思

えば、そうではなく、叔父である主が経営するここに来てまだ八年目だと言っているのか。これには参った。自分の社会人経験と、ほぼ同じ年数で、ここまで客を喜ばせるものを生み出せるとは恐れ入る。自分の仕事は、ここまで客を喜ばせそうにない。参った。自分達は彼の料理を褒めまくらずにはいられない。

食後、一休みした後、蓋から桶まで檜の小さな風呂で男二人の裸の付き合い。宿の人の話では、今夜の客は自分達だけらしく、他人を気遣う必要がないのいい事に、自分達は、べらべらと話しているうちに結構な長風呂になってしまった。廊下に出れば、温度は零度。相変わらず何をすることもなく、暫く炬燵に入ってお茶を飲んだ後、静謐な眠りを貪る為に布団に入った。

こうして、塩尻で笑い、奈良井で落ち着いた徘徊の一日は終わった。

¥ 木曾路徘徊 第二日

朝。室内は零下四度。体を硬くしつつ、ガスヒーターと炬燵、それにお茶で温まった後、朝食を戴く。昨日の夕食同様に素朴な美味さだ。すっかりゆったりりのんびりして、このままここで贅沢な時間を過ごしたい気もしたが、今日は今日で予定がある。「えちごや」の落ち着いた過ごし易さと気取りのないもてなしに、名残惜しさ感謝の思いを一杯に感じながら、自分達は旅籠を出た。

向かった先は近隣の中心都市にして、かつての城下町である松本だ。松本の核である松本城へ足を運ぶ途中、源智の井戸を見たりと、ふらふらし、千歳橋を渡って、いざ城へ、という時に視界右側に神社が見えた。今回の旅で神社をチェックしていた自分は、そこへ寄る事を提案する。カエル大明神なる妙なシンボルの像を横目にナワテ通商店街を抜け、着いた神社は四柱神社という名だ。明治七年創建と新しい。祭神は、天之御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神、天照大御神の四柱で、だから、この名前なのだろう。それにしても、八百万の神々の中でも天地創生期のスケールの大きな神様ばかり祭っていると、これも明治創建ゆえか。鳩が群れ集まって人とニアミスを起こしそうな有様で、社殿の後ろにN T Tのビルが聳え立つ風景は、或る意味、興味深い構図である。自分はお参りを済ませると、お守りの販売所を物色する。見つけた。病氣平癒のお守りだ。実は知人の親が倒れて入院し、毎日、その知人が仕事の後に病院に顔を出していると聞いて以来、気になっていたのだ。もう自分の親も若くなく、他人事ではない。大変そうなので何か役に立てないかと考えはしたものの、仕事や看病の手伝いができる訳でもなく、そこで今回の旅で神社を見つけたら、病氣平癒をお願いし、あれば、お守りを買っていいことと思っていたのだ。本来、無神論者の自分だが、この場合、神がいるとかいないとかより、願い事をする気持ちが大変なのである。とにかく、個人的な用件を終えて自分なりに一段落して、改め

て松本城へと向かった。現存する五層天守閣の中では日本最古で国宝に指定されている松本城の内部を見学する。如何にも城らしく、窓は少なく暗い。壁に多く設けられた狭間から外を覗き、下を歩く観光客を見ながら、そこから弓や鉄砲を発射する往時の戦いを想像したりする。石垣を攀じ登る敵に石を落とす為の石落も多い。この他、天主の二階にある松本城鉄砲蔵には、多くの銃が展示されていた。一般的な火縄銃から、バズーカのようなものや連発にする為に幾つも銃口があるものといった変わり種まで様々な銃が揃っていて、かなり面白い。急勾配で歩きにくい階段で最上階まで上がった後は、そそくさ下りて外に出て、松本城公園を歩いた。妙に猫がうろついているのが気になる。黒い城郭、赤い橋、青い空と堀の水、そこにすました猫という構図は中々に風情があつて良い。

続いて、松本城の裏にある旧開智学校へ。明治九年頃に建てられた日本最古の小学校の一つであり、重要文化財に指定されていることは、日本人の大王が西洋建築を見よう見まねで建てた擬洋風建築が見所だ。唐破風の屋根に天使が舞い、バルコニーに竜が鎮座するデザインは現代の無機質な建造物にはない楽しさがあるが、造りが雑なのか、何となく玩具の洋館が大きくなった様でもある。殆どの窓が閉めきられていたせいか肌寒い構内には、江戸時代から戦後までの教科書や教材、玩具等が陳列されていて、これが興味深い。かつて、算数は漢数字で行っていたのを知り、考

えてみればそうだよなと思いつつも、見ただけでもやりづらそうだ。並べられた木製の小さい机や椅子に懐かしさを覚え、教材類を見て、何となく昔の学校の方が楽しそうに思えた。道徳的に厳格な面はあっただろうが、今よりも学ぶ楽しさや人間味を味わえそうなのは、単に過去を理想視してただけなのか。いずれにしろ、こんな校舎だったら、それだけでも今の味気ない鉄筋コンクリ造よりも楽しいだろうと思う。

腹を減らした自分達は松本駅の駅ビルで鴨南蛮を食した後、R大系線に乗って二駅先の島内へ向かう。車内には、制服姿の女の子が数人乗っていて、一人はモーニング娘。の紺野あさ美に似て素朴な可愛らしさだ。首都圏も地方も可愛い子は可愛いし、そうでない子はそうでない。町中を徘徊したり、公共交通機関を利用したりする時の、一つの楽しみである。我ながら、しょうもない男だと思つ。でも、綺麗なものは、人間であれ風景であれ、それを見ただけで幸せになれる。

島内駅で下車する。駅前に特別な何もない普通の駅だ。ここで下りたのは、笹井酒造に行く事が目的だった。酒の醸造と貯蔵にモダンジャズによる音響醸造を採り入れている酒蔵だ。普段飲む時も各地の地酒を出す店で一晩に八千円近く使つのが当たり前前の自分とKは、この様な場所には行ってみたい。飲んでみたい。しかし、行き当たりばつたりの自分は、笹井酒造に行きたいとは思つても、完璧に場所を調べてまではいなかった。駅に下りても、

そこからどう行くのか分からない。ガイドブックに載った酒造でも案内板は、どこにもなかった。自分は駅前のケーキ屋に入つて道を尋ね、意気揚々と歩き出す。空模様は怪しくなり始めていた。

観光地感覚は皆無の普通に薄汚い酒造に着いてみれば、どこから入ればいいのか分からない。あちこちとろついてみれば、中から人が出てきて、今日は休みだと言つ。ガイドブックには無休と書いてあるのに。とは言え、休みでは仕方ない。無駄足に少し消沈し、自分達は駅へ戻り始める。Kも、さして文句は言わない。とは言え、付き合わせただけに少し悪いと思う。空からは、ちらほらと雪が舞い降りていた。

島内駅の待合所に入ると、老女が一人座っていた。帰り方が分からないと相談される。何でも行きは松本からハイヤーで来たので、電車の乗り方が分からないらしい。地元の人にしては珍しいと思いつつも、Kが切符を買つてあげて少し話した。電車が来るまでには、まだ随分と時間がある。ここで考えた。この老女と話しながら電車を待つか、それとも、松本まで二駅分を歩くか。Kは老女と話していたそうにも見える。確かに地元の人との交流は旅の楽しみだ。一方、今日は松本城に旧開智学校と典型的な観光地を点として見ただけで、徘徊という徘徊をしていない。酒造が休みだったのもあり、このまま、すこすこ帰るのは何となく勿体ないと言つか物足りない気もする。

「歩こう！」

一言、言ってみる。Kが電車を主張すれば、それでも良かったが、彼は反論しなかった。老女に挨拶してから、自分達はろくな地図もなしに、方角だけで松本へと歩き出す。所々で迷って行き止まりにぶつかって取って返したりしながら、川を越え、国道脇を歩き、小高い丘の如き場所を登って、住宅街の裏手に出た。やたらと大きな金持ち風の邸宅を眺めたりしつつ、約一時間をかけて自分達は本日の宿であるホテルブエナビスタに着いた。

荷物を部屋に置いて一休みしてから、夕食へ。ガイドブックに載る目ぼしい店の類は日曜休みで使えない。自分達は、地鶏料理の「ぢどり亭」に入った。所謂、普通の居酒屋だ。伝説のウッドストックのライブのポスターが壁に貼ってあるのが気になるくらい。昨晩とは違って、ありきたりの飲食をしつつ、これまた昨晩とは違って、のんびりではなく、二人でかなり激しい議論をした。二人旅で入った居酒屋で、大きくは北朝鮮問題やら元号や天皇制の問題から小さくは互いの人付き合いの仕方や言葉の使い方まで大声で口角泡飛ばして話しまくる観光客も珍しい。多分、店の人や他の客は、「この二人は何者？ 喧嘩してるのか？」とも思っただかもしれない。が、当人にとっては、そついった話題で真剣勝負できる関係がかけがえのない魅力なのだ。少なくとも自分はそう思っている。恐らくKも同じだから友人として付き合ってくれている。これが自分の単なる誤解にすぎず、Kはそう思わずに自分の事を喧嘩を吹っかけてくる不快な奴だと思っただけだと思つたりする

非常に拙い。こんな事を書いていたら少し不安になってきた。いやいや、大丈夫。大丈夫な筈だ。

歩き疲れと喋り疲れの二重疲労で部屋に戻り、例によって早寝のKはベッドに倒れ込んだ。夜も朝も平気な自分は、一人で時間を持て余す。暫くして決心し、Kを部屋に置いてホテルを出た。道端の自動販売機で買った熱い缶コーヒーを懐炉代わりに、薄川の水音を聞きながらふらふら歩き、そこから中心街に戻って駅前に出た。深夜の街とは言え、ここは新宿や渋谷ではない。松本だ。前回の瀬戸内徘徊の今治ほどではないまでも、深夜に営業している店はチェーン店の居酒屋くらいしかない。チェーン店の居酒屋で一人で飲んだくれる三十路のオヤジになるつもりはなかった。どうしたものかと歩いていると、道端に占い師がいた。この類の輩は胡散臭いだけなので気にしない事になっている自分は、いつも通り、無視して通り過ぎた。が、やる事もない。時間は余りある。これも、経験だ。そう思った自分は引き返し、占い師に見てもらった事にした。手相である。人の悪い猜疑心と意地の悪い好奇心に満ちた視線を注ぐ自分に、その占い師は色々と語り始めた。親に對してトラウマがあるとか何とか、素直に聞いてみると当てはまる気がしてくる事も多いが、冷静に考えると誰でも当てはまりそうに言葉は巧妙に抽象化されている。今年の後半に人生の転機が訪れるらしい。その時には自分の事ではなく他人の為になる事を考えねばならず、それが自分の為になるのだと言つ。宗教や哲学

を趣味で齧っている理屈屋の自分は、「ひいては自分の為になる事として他人の為を考えるのは、結局は自分の為にするのと変わらなないんじゃ？」と質問する。確か、カントだか誰だか、この様な議論をしていた。すると、占い師は、「それが分かっているのは良い事だ」と言つてのける。巧いものだ。最近、人生手詰まり感のある自分は、この際、その転機となると言う今年後半の出来事をつ突っ込んで訊いてみた。すると、それを具体的に占うには、別料金になるのだと言つ。ほら、来た。来たよ、来た。案の定の商売根性つて奴だ。週刊誌の見出しや風俗系サイトの宣伝文句みたいに人の興味を惹いて金を出させて、幽霊の正体見たり枯れ尾花、などと騙されるものか。真冬の松本で真夜中に道端で簡易な椅子に座らされ、占い師相手に震えながら遊んでいるのも限界だ。人生経験を兼ねた冷やかしも、この程度でいいだろう。自分は終わりにしてもらつ事にして、ここまでの料金を尋ねた。その時になつて初めて、占う前に訊いておくべきだったのではないかと一抹の不安が過ぎる。占い師が答えるには最低三千元からで、後はお客様が自分の占いにどれだけ値段をつけてくれるかだと言つ。迷わず、「じゃ、三千元で」と言い切つた。こんな与太話を聞くだけで三千元という時点で馬鹿高いのに、どこの世の中の上乗せして払う阿呆がいるものか。でも、損したとまでは思わない。暇潰しになつたし、初の道端座り占いは一経験として面白かつた。あっさり三千元を払つて、席を立つ。この人通りない寒い街中で

一晩座つていて三千元という商売は、楽なのかきついのか。世の中、色々な職業があるものだ。自分は、やりたくない。一応、占い師に「風邪ひかないで下さいね」と挨拶しておいた。意地の悪い冷やかしてケチつけて、必要以上に不快にさせても悪い。ともかく、自分なりに松本での夜を楽しみ、満足してホテルに戻つてベッドに入った。

こうして、考えてみれば旅先でなくてもできる事ばかり楽しんだ感のある松本での、議論と占いの一日は終わった。

¥ 木曾路徘徊 第三日

今日の朝食は松本駅改札近くのパン屋兼喫茶店でピーナッツバターサンドにする。普段、自分はパンにはバターかマーガリンしか塗らないが、時折、無性にピーナッツバターが食べたくなるのだ。その後、近くの土産物屋で、昨日、買い損ねた笹井酒造のモダンジャズによる音響醸造の地酒を手に入れた。どこでも買えそうな菓子等に土地の名物の名を冠しただけの如き土産物は全く買つ気がないが、そこにしかなさそうなものには興味をそそられる。酒好きの父親への土産と称して実家に持参し、自分も飲んでしまおうという腹だ。親孝行と自分の欲望の両方を果たせるのだから、結構な事である。

朝食と買ひ物を済ませた自分達は、妻籠を目指して松本駅から

南木曾駅へ向かう。とは言え、別に意気込む訳でもなく、のんびりと電車で揺られて行くばかり。途中、あの児童館跡が有名な(?)塩尻駅のホームで暫く停車していれば、ホームに佇む鳥や雀をぼんやりと観察したり、名も知らぬ山並みを見上げたりしていた。

同じ車両に乗り合わせた老女三人組は仲間の一人が転んで大腿骨骨折をしたとかの話で盛り上がっている。考えてみれば、雪深い地で高齢者が生活していくのは大変そうだ。彼女達の話は次第に、何処の誰だかが「死んだ」とか「いや、生きてる」とかの少し物騒な議論になっていく。年を取った仲間が集まれば病氣自慢になるというのは良く聞くが、更に老いると、死んだ死なないにまでなるのかと思うと、少し怖いものがある。かと思えば、別の乗客の若い男女二人は受験生らしく、センター試験だの立命館大学だの話をしている。どうやら男の子の方が頭が良いらしく、やたらと強気な発言を繰り返していて少し鼻持ちならない気もするが、既に学生時代も今や昔となった自分から見れば、何やら微笑ましくもある。

同乗者の地元の人々の会話に耳を欬てつつ、車窓の景色をぼんやりと眺める。山と青空、そして、ゆつくりと流れ行く雪。あちらこちらに積もった雪が日の光を照り返して眩しいが、それもまた嬉しかったりする。

下手すると仲の悪い二人の男が手持ち無沙汰にしているだけでも見える会話の少ない状態で、自分達は妻籠に着いた。これが自

分達の楽しみ方なのだとは思うものの、もしかしたら、Kの方は本当に手持ち無沙汰だったりするのだろうか。ふと不安にもなるが、まあ、嫌なら一緒にいる筈もないので考えない事にする。

江戸時代には中山道の宿場町として大いに繁盛したらしい妻籠は、現在も往時の町並みの殆どが復元されている。奈良井も復元されている点は同じだが、妻籠の方が規模は大きい。それゆえに観光地としては勝っている様だが、自分としては単純に評価はできない。規模の大きな観光地には当然ながら観光客が集まる。人氣薄の季節に来たとは言え、中学の修学旅行らしき団体客で町は妙な賑やかさを湛えていた。未だ素朴な若い子が楽しげに戯れている姿を老けた視線で眺めるのは嫌いではない。かつて、この町も宿場町として賑わってもいた。しかし、江戸時代の町並みの中で、制服姿の現代っ子らが他の観光客を気にする様子もなく傍若無人に雪合戦を繰り広げたり写真を撮ったりしているのは、余り風情がない。以前から旅に出る度に感じる観光地ゆえのジレンマである。観光地だから自分を含めて人は集まり、人が集まるから観光地の本来の魅力は薄れていく。だが、人が集まらねば観光地は成り立たない。分かっているが、何か寂しい。妻籠をKと二人で歩き、町外れまで来ると他の観光客も見当たらなくなった。山の緑と家屋の木、そして、晴れた青空からの暖かい光に溶けた雪が屋根から落ちる滴の音。賑やかさや華やかさより、自分は、そんな静けさや落ち着きが好きだ。それが欲しくなると徘徊の旅

に出るのかもしれない。首都圏の喧騒や忙しさから逃れたいから、人のいない所に行って歩きたがるのかもしれない。だから、自分は妻籠よりも奈良井の方が性に合った。訪れた時が、奈良井は雪の積もった夕方で、妻籠は雪の溶けた昼間だったのも、雰囲気の違いを感じさせたのだろうか。

一頻り妻籠の散策を終えると、自分達はバスに乗って南木曾駅へ戻った。途中、バスの車内で前の席に座った外国人の女の子の可愛さに笑みを零したりして、駅に着けば、目的の電車が到着するまでに、かなり時間の余裕がある。自分達は腹捲えを兼ねて駅前の建物の二階にある喫茶店「石川」に入った。朝のピーナッツバターサンドに続いて、昼はジャムトーストとコーヒード。我ながら旅先でなくても何処でも食べられるものを食べ続けている一日である。グルメ好きの典型的日本人から見たら、何とも勿体ない馬鹿げた旅だろう。そんな事は大して気にもしない自分は店の窓から見える山を眺めつつ、山好きらしい店長とKが、山の上に被る雲について話したりしているのをぼんやり聞いたりして過ごす。電車の時間が近づき店を出た自分達は、少し疲れ気味で言葉少なに特急スーパ―あずさの座席に体を預け、喧騒と忙しさに溢れた大都会へと帰ったのだった。

こうして、流行りのスローライフを地で行く感のある自分達の木曾路の徘徊は終わった。